10 月 17 日のメッセージ

聖書：ヨハネの黙示録　7：　9－17

「玉座の中央におられる小羊」

長かった聖霊降臨節も今日までです。この教会暦は一つの区切りを迎えます。

辛く、苦しい人生の終わりに何が待っているのか。たとえ信仰者であってもこの疑問から完全に自由ではありません。むしろ、信仰者として生きづらい毎日を過ごしていれば、その疑問は大きくなるでしょう。

疑問に聖書は答えます。神に忠実に、その生涯を全うした人は天に引き上げられ、神をたたえる。苦しみから離れて、涙とは縁のない状態になる。神の前に、真に自由な姿で引き上げられる(「それゆえ、彼らは神の玉座の前にいて、／昼も夜もその神殿で神に仕える。玉座に座っておられる方が、／この者たちの上に幕屋を張る。彼らは、もはや飢えることも渇くこともなく、／太陽も、どのような暑さも、／彼らを襲うことはない。」ヨハネの黙示録 7:15-16)と。

そこに描かれる様子は私たちの知っている世界とは大きく違っています。常識的には牧される存在である小羊が全ての者を牧します(「玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、／命の水の泉へ導き、／神が彼らの目から涙をことごとく／ぬぐわれるからである。」ヨハネの黙示録 7:17)。

その小羊の赤い血で洗われた衣が白く輝きます(「そこで、わたしが、『わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです』と答えると、長老はまた、わたしに言った。『彼らは大きな苦難を通って来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。』」ヨハネの黙示録 7:14)。

地上とは異なる価値観の世界へと復活させられ、命の泉へと導かれるのです(「命の泉はあなたにあり／あなたの光に、わたしたちは光を見る。」詩編 36:10)。

これが信仰者の希望となります。

ところが、まだまだ常識の延長線上にしか救いを捉えていない人間は、自分の思い通りにことを進めようとします。そんな素晴らしい世界ならば一日も早く行きたいと願うのです。悩みと憂いばかりの毎日よりも安心できると期待します。これもまた人間の偽らざる欲望でしょう。

しかし神は応えられません。神は早く来いとは言われません。それぞれに与えられた生涯を全うするところにこそ救いがあるのです。「その時」は人間ではなく、神が決められるのです。

いずれ訪れる「その時」にそれまでの人生は正しく裁かれます(「まことに、主は我らを正しく裁かれる方。主は我らに法を与えられる方。主は我らの王となって、我らを救われる。」イザヤ書 33:22)。ここでも神は人間を優しく見つめられます。勝手に歩けと見放されることはありません。裁くだけでなく、神と共に歩みやすいようにと掟も与えてくださるのです。

だから、足下を見つめるばかりでなく、過去ばかりを振り返るのでもなく、神を見上げて歩くことができます。目を覚ましてその時まで生き続けることができるのです(「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」マタイによる福音書 25:13)